

## 水にまつわる語を用いた比喩について(1)

山 田 仁 子

### Metaphors with Words Related to Water in Japanese (1)

Hitoko YAMADA

#### Abstract

This paper examines metaphorical expressions with Japanese words which originally describe water in pool or things in pool of water. With its familiarity and its various forms and conditions, water provides us a lot of basic patterns to classify things and events around us, and gives birth to various metaphorical expressions.

Running water becomes a pool in a depression. The depression can be seen as a kind of container to hold the water, with the top surface and the bottom. The notions of “surface,” “bottom,” and “container” are critical factors in the meanings of some Japanese words related to water, like *asai* ‘shallow,’ *hukai* ‘deep,’ *uku* ‘float,’ and *shizumu* ‘sink.’ *Asai* ‘shallow’ means that something is only a short distance away from the surface to the bottom of water. *Hukai* ‘deep’ means that something is a long way down from the surface. *Uku* ‘float’ means to move up to the surface or up away from the bottom. *Shizumu* ‘sink’ means to move down from the surface or to the bottom. In the metaphorical uses of these words, the three critical notions of “surface,” “bottom,” and “container” survive, while other factors in the original meanings drop out.

## 序

日本語においては水にまつわる語が様々な比喩に用いられる。例えば、“浮く” “沈む” という語は本来、物が水面あるいは水底にとどまる動きや状況を表すが、比喩として人の精神状態を表すこともできる。楽しいことがあれば人の心は“浮き立ち”，悲しいことがあれば心は“沈む”。

水は人間が生きていく上で最も重要であると同時に、最も身近に親しんでいる物である。水に触れる経験は、人間にとって基本的な経験であり、人間が初めて遭遇する事物や抽象的なことがらを理解するためのよりどころとなる。新しく経験する事物の中に、すでに十分理解のできている水に関する経験との類似点を探ることにより、未知の経験を整理し理解していく。

水はまた、その変幻自在さと、他の物との関わり方の多様さゆえに、様々なことがらや状況を比喩的に表す力を持っている。水の多様な在りようは、状況理解のための基本パターンを数多く提供するのである。水はその置かれる状況により様々に変容する。もともと定まった形のない水は集まり動きを得れば“流れ”となり、“流れる”水が窪みに会えば動きを止め、“澱み”，“溜まる”。窪みの大きさにより水は“深く”も“浅く”もなる。温度が下がれば“凍り”，温度が上がれば“溶け”て“沸く”。水に接する物は“浮き”も“沈み”もする。水に“溶け”てしまうこともある。水の変容、水の他の物との関わりを表すこうした語は全て比喩としての用法を持ち、水に関わらない状況を表すことができる。

水にまつわる語が比喩表現で用いられる場合、比喩において生かされる水の性質は次のように分類される。各々に相当する語もあわせて例示する。

1. 窪みに溜まる水： 浅い， 深い， 浮く， 沈む， 満ちる， 浸る
2. 流れ動きを変える水： 流れる， 澱む， 波立つ
3. 変質する水： 溶ける， 沸く， 濁る， 澄む
4. 物に含まれる水分： 湿る， 乾く

水の窪みに溜まる性質が生かされる比喩は更に、溜まることによって生じる水の外形が特に生かされるものとそうでないものとに分けられる。本稿では、1. 窪みに溜まる という水の性質が生かされる比喩表現の中から、特に溜まった水の外形が生かされるものについて考察する。水が窪みに溜まると水に形が与えられる。水の外枠が生じるのである。まず、水面と水底という概念が生じ

る。“浅い”“深い”等は水面と水底の概念を基盤とする語であり、この概念は比喩の用法においても重要な意味を持つ。また溜まった水には水全体を包む枠が生じる。これは水の入る限られた空間、つまり一種の容器として捉えられることになる。“満ちる”等は水と容器の関係を示す語であり、この関係は比喩の用法においても重要な意味を持つ。本稿では一章で水面と水底の概念が重要な意味を持つ比喩表現を、また二章で容器のイメージが重要な意味を持つ比喩表現を、順次論じていく。

### 1. 水面と水底のイメージが生きる比喩

水面と水底を基準に垂直方向での位置あるいは方向性が、下に挙げる語彙の意味には含まれる。この位置関係と方向性が、比喩表現に生かされる。以下この点について語彙ごとに検討していくが、“浅い”と“深い”、“浮く”と“沈む”はそれぞれ一対の語としてまとめて見ていくことにする。

浅い, 深い, 浮く, 沈む, 漂う

浅い, 深い:

まず、“浅い”“深い”という二語について考察する。本来“浅い”は水面から水底方向への距離が短いことを、“深い”はその距離が長いことを表す。比喩表現においては、この距離の差が生かされる。また二語の使用における視点は水面から水底の方へと向いている。距離に加え視点も比喩表現に生かされると、ものごとの程度の差を表すことになる。尚、水のイメージについては強く生かされている比喩表現から、ほとんど感じられない比喩表現までである。

次の例(1)~(9)において、“浅い”“深い”という二語により描写される物は水以外の物に替わる。ただし距離という物理的状況を表す点に変わりはない。二語が本来表す距離の差をそのまま生かした比喩である。(1)においては、本来描写されるはずの水が“すきま”に替わっている。水の表面は“すきま”の入り口に、水底は“すきま”の奥に対応する。水を描写する際と同様の物理的広がりを表すことは、本来水の中に入ることを表す語“もぐる”が共起していることから明らかである。(2)においては水が“霧”に替わる。霧が晴れる場所までの距離が遠いことを“深い”は表している。(3)~(9)においても、“浅い”“深い”という語は物理的な広がりや距離を表す。(3)においては椅子の座面を占める面積、(4)では頭部を帽子が覆う広さ、(5)(6)では傷の大きさ、(7)では顔のおう

とつ、(8)では頭が通常的位置から下方へ下がる距離、(9)では空気が口から体の中へと入る距離の程度を表す。ただし(3)~(9)に見る“浅い”“深い”の用法はかなり慣用化しており、使用の際に水のイメージが意識されることはないと思われる。

- (1) (ねずみが) もうせまいすきまへずうっと深くもぐり込んでしまった  
(クねずみ, 85 (括弧部分および下線は筆者, 以下同様。))
- (2) 深い霧
- (3) 椅子に深く腰をかけたまま, 考え込んでいた (女社長に乾杯, 541)
- (4) ソフト帽を目深にかぶっている (女社長に乾杯, 175)
- (5) 傷は浅い／深い
- (6) 浅手／深手を負う
- (7) 顔だちが彫りが深い (比喩表現の理論と分類, 378)
- (8) 深々と頭を下げた (もやし, 128)
- (9) 深々と息をつき… (もやし, 127)

次の例(10)において“浅い”“深い”という語が示すのは、目に見える物理的広がりや距離ではない。より抽象的な眠りの感覚を表している。“深い眠りに落ちてゆく”という表現が可能である事からも分かるように、ここで“眠り”は海のようなある程度体積を持つ水の溜まりのように捉えられている。眠りの感覚は水の中にいる感覚に喩えられる。“深い”水から体を出すのが困難のように、“深い”と喩えられる熟睡の状態から目覚めるのは困難である。逆に“浅い”水からだ体がすぐにも出てしまうように、“浅い”眠りからはわずかな刺激でもすぐに目覚めてしまう。眠りと水中にいることとの複合的な関連づけがこの例には見られる。これは(10)が水のイメージを明確に生かした比喩表現であることを示している。

#### (10) 浅い眠り／深い眠り

(11)に挙げる抽象的語彙についてもほぼ同様の比喩による形容が可能である。もっとも“深い”が問題なく用いられるのに対し、“浅い”は用いられにくい。“深い”と形容される時これらの語彙が表す状態は、体積を持つ水の溜まりのよ

1) 各例においては、問題となる水にまつわる語および論ずる上で重要と思われる部分に下線を施している。

うに捉えられている。それぞれの語彙が表す状態からなかなか抜けられない様子が、深い水の中から出られずにいるイメージに喩えられる。このイメージから“深い感動に浸る”という表現も説明できる。更に、本来水にまつわる語でありながら程度が大きいことを表す表現としては、“深い”以外にも“底知れない”という表現があるが、これには不気味さの意味合いも加わるので、“不安”等の否定的意味合いを持つ語彙を形容するのに適している。

(11) 感動, 沈黙, 疲れ/疲労, 関係, 友情

“浅い”“深い”の表す意味は(12)~(18)においては更に抽象化され、ことごらの程度のみを表す。具体的な水のイメージは消え、ある状態から抜けられないといった感覚は伝えない。二つの語が本来表した水中での垂直線上の位置の違いが、この比喻においては尺度上の数値の違いに置き換えられてしまっている。“浅い”“深い”は水面に視点を置いた語であるから、水面が尺度のゼロに対応する。また水底を向いているので、深まる方向は尺度の数値が高まるのに対応する。(12)の“まだ”, (17)の“さらに”, (18)の“そんなに”といった語はこれらの文における二語の使用が程度を表すことを明示している。“浅い”“深い”の意味がこの用法においてはかなり抽象化し、使用において水のイメージが意識されることはまずないと思われるが、(13)の例に対して“底の浅い考え”という表現も可能であることから、表面と底を持つ立体的イメージは生きていると言える。<sup>2)</sup>

- (12) まだ経験が浅い (女社長に乾杯, 88)  
 (13) 深い考え  
 (14) 深い意味もないような物語 (女社長に乾杯, 927)  
 (15) 執念深い, 嫉妬深い,  
 (16) クラシック音楽に造詣が深く, もの静か (女社長に乾杯, 925)  
 (17) さらに深く事件の真相を探知 (クねずみ, 81)  
 (18) そんなに深くお付き合いした人はありません (女社長に乾杯, 312)

(19)~(23)の“浅い”“深い”は時の経ち方を表すが、やはり尺度上の数値の違い

2) 比喻により程度を表す“浅い”“深い”の用法は(i)のように漢字熟語にも見られる。

- (i) 浅才, 浅学, 浅慮, 深慮

を示す用法の一つである。この用法は私達人間が無意識に時に尺度を設けることで可能になっている。(19)では何か事を始めた日が尺度のゼロに相当する。(20)の基盤となるのは、一日が朝にはじまり夜に終わるという尺度、(21)(22)の基盤は一年が春にはじまり冬に終わるという尺度である。(23)の“浅”は(19)~(22)のように直接時を表す語と結びついてはいないが、漬物を漬け始めてからの時間が短いことを表す。漬け始めた時が尺度のゼロに相当する。

- (19) 日が浅い
- (20) 夜が深まる
- (21) 春まだ浅い頃
- (22) 秋が深まる
- (23) 浅漬け

“浅い”“深い”は色の濃さの違いも表す。(24)~(26)はその例である。(26)では色そのものを示す語は現れないが、闇の暗さとは黒の色にほぼ等しい。色の濃淡が一つの尺度となっている。ただし、少しでも色のついた水は深くなればなるほどその色が濃くなるという事実も、この用法に反映されていると思われる。

- (24) 深い色
- (25) 浅緑／深緑
- (26) 夕闇が深まって… (フルハウス, 84)

“浅い”という語は、上に見てきた程度の低さを表す用法から派生して、“悪い”ことを表す用法もある。(27)(28)はその例である。抽象化が進んだこの用法には、水のイメージはほとんど感じられない。

- (27) 浅はか
- (28) 浅ましい

浮く、沈む：

次に、“浮く”“沈む”について考察する。“浮く”は本来、水面にとどまった状態になること、あるいは水底を離れて上方の水面へ向かうことを意味する。また“沈む”は水底へ向かう、あるいは届くことを意味する。水面と水底の存在が、この二語を用いた比喩表現においても重要となる。

(29)において“浮く”は比喩として用いられているが、語の本来の意味も保っている。“浮く”の成立する場が水から真空に替わってはいるが、この置き換えははっきりと意識されている。“もしも…ほんとうに川だと考えるなら”，“何がその川の水にあたるかと言いますと”といった表現が示すように、本当は水でない天の川と本当の水でできた川という二つの異なるものが、話者の頭の中には同時に存在し関連づけられている。“やっぱり”という語も示すとおり，“浮く”は二つの異なる枠に同じようにあてはまるものとして用いられている。

(29) もしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、… 何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮かんでいるのです。

(銀河鉄道, 238)

水への比喩であることが明確に示されない例を次に見ていく。(30)~(36)で“浮く”“沈む”という動きが成立する場は水中ではない。様々に切り出され、枠を与えられた空間が、容器の中の水にとってかわっている。(30)(31)では空を含む地上の空間、(32)(33)ではストライク・ゾーンが一つの枠と捉えられ、この枠内で上方に行くことが“浮く”，また枠内で下方に行くことが“沈む”と表現されている。(34)では椅子の座面を底とする空間、(35)では座ってくぼむ前の椅子の座面を最上部とする空間が、“浮く”“沈む”の成立する枠となっている。(36)は状況に驚き呆れた時の目の動きを表すが、普段視線が行く範囲が基準の枠となって、普段は行かないような上方へ視線が行くことが“浮く”と表されている。

(30) 空にはところどころ雲もうかんでいるようでした (二十六夜, 144)

(31) さそり座は西へ沈むところでした (同上, 140)

(32) 90球目は、高めに浮いて痛恨のサヨナラ押し出し (朝日 97.8.10)

(33) 制球できなかったカーブが不思議ときわどいところに沈んだ

(朝日 97.8.10)

(34) それまで腰を浮かして成り行きを見守っていた男はほっとして椅子に座り… (フルハウス, 62)

(35) 椅子に腰を沈めた (もやし, 155)

(36) 私は視線を宙に浮かせた (フルハウス, 50)

“浮く”“沈む”の比喩表現においては、特に水面のイメージが重要な働きを

する場合がある。水面より下に沈んだ物は外にいる人に見えないが、水面上に浮くものはよく見える。“浮かび上がる”という語は、沈んだ状態から浮いている状態への変化を表すが、何か物が水面まで浮かび上がると、その物は急に目に見えるようになる。(37)(38)(39)の“沈む”“浮かぶ”“浮かび上がる”は、物の見え方の違いと変化を表している。(37)では部屋全体が暗く見えなくなっていることを“沈む”が表す。(38)は夜の暗やみの中で白い少女の四肢だけがはっきり見えていることを“浮かぶ”が表す。(39)では暗くて何も見えなかったところに花火のせいで老婆の姿が急に見えるようになった変化を“浮かび上がる”が表す。(37)(38)(39)では暗やみが容器に溜まる水に、暗やみの中で見えるものが水に浮く物に喩えられている。

- (37) 部屋は夕闇に沈んでいる (もやし, 160)  
 (38) 少女の四肢がやけに白く浮かんでいる (フルハウス, 68)  
 (39) 老婆が強い花火に照らされて浮かびあがった (同上, 87)

(40)(41)(42)においては容器に溜まる水に相当するものが明確ではないが、水面に喩えられるのは、(40)ではバックミラー、(41)では顔面、(42)では眼がこれにあたる。これらの場に見えるようになることを、“浮かぶ”は表現している。

- (40) 父のうっすらした笑みがバックミラーに浮かび… (フルハウス, 21)  
 (41) 透に笑みを浮かべて頷いている里奈の顔 (潮合い, 128)  
 (42) 彼女の眼にこの時、哀願の色がうかび… (深い河, 309)

(43)～(52)における“浮く”“沈む”は物理的に目に見えることではなく、心理的、抽象的な見えを表している。水面に浮き上がったものと水面下に沈むものとの対立から、明確なものと不明確なものとの対立を比喩的に表す。

人の頭の中には記憶や考え、まだそのような形を取るにも到っていないぼんやりとした思いなど多くのことが詰まっているが、その多くは普段意識されずにいる。その内の一部がふいに何かのきっかけではっきりとした形をとって意識されることになる。(43)～(47)では、頭や心が水の溜る容器に喩えられている。頭の中で意識されない不明確なものの中から、明確な絵や考えが現れ出る変化を“浮かぶ”“浮かびあがる”という言葉が表す。(45)で“底”，(46)で“表層”という語が共起していることは、記憶や心が溜まった水に喩えられ、意識され

ないものが水底に存在するもののように、また意識されるものが水面に存在するもののように捉えられていることを示している。(47)では思い出の現れ方を“水泡のように”という慣用化されていない水にまつわる表現で形容しているが、これは頭を容器とする水のイメージを新鮮に生かしたものである。

- (43) そのうち、世の中が、俺を発見して驚く姿が目に浮かぶよ  
(そこに僕はいた, 134)
- (44) 誰かが死んだのかも、不吉な考えが浮かび、受話器をとった  
(もやし, 105)
- (45) 記憶の底から…この夫が浮かびあがった (深い河, 46)
- (46) 七瀬の質問でバットの若者は、彼が恐れている対象を心の表層に浮か  
びあがらせた (エディプスの恋人, 10)
- (47) そんなつまらぬ思い出が次々に水泡のように浮かんで消える  
(深い河, 254)

頭や心以外のものも、水を溜める容器に喩えられる。(48)～(51)では、漠然とした集合が容器に、あるいは容器の中の水に喩えられている。(48)では刑事が犯人を捜す過程で、犯人が誰だか分からない中から一人の人物が明確な容疑者として存在するに到る変化を、“浮かぶ”という語が表している。(49)では街頭演説のテーマが多数可能な中から一つのテーマが決定される変化を“浮かびあがる”という語が表す。(50)では多くの事実の中から一つの疑いが生れる変化を、(51)では二位以下の多くのゴルファーの中から一人首位へと変わったことを“浮上”という語が表している。いずれも不明確あるいは目立たない多数の中から一つ明確に目立つものが現れている。

- (48) 前に、純子も病院で見たことがある、若い刑事だ。  
「一人、浮かんで来ましたよ」と勢い込んで言った。  
(女社長に乾杯, 707)
- (49) 街頭演説で、にわかにテーマに浮かび上ったのは神戸市の中学三年  
生の容疑者による小学生殺害事件である (朝日 97.7.8)
- (50) 第二次大戦中にクロアチアの親ナチ組織ウスタシャがユダヤ人やセル  
ビア人から没収した金貨の一部を、戦後もバチカンが保管していた疑い  
が浮上 (同上 97.7.25)
- (51) 首位タイに浮上したタイガー・ウッズ (同上 97.7.8)

“浮く”が目立ちを表すのに対し、“沈む”が“目立たない”ことを表す例もある。(52)で“沈む”は色を形容している。“沈む”ということは水底に近くなる、つまり深くなるということで、“沈む”色は(24)で見た“深い”色に近いはずである。濃淡で言えば濃い色であろう。しかし“深い色”と“沈む色”とでは、客観的な色は同じでも捉え方が異なる。“沈む”は本来の“水面下に入る”という意味から“目立たない”という意味を伝える。(52)で“沈む”と形容される色は“地味”で、テレビでは目立たないために“損”な色なのである。

(52) 「うーん。ちょっと沈むなあ」

と言った。

「沈む？」

「色がね。TVカメラにとると、そういう地味な色は損ですよ」

(女社長に乾杯, 187)

物が水に浮くと、その物ははっきり見えるようになるだけではなく、しばしば水面よりも上にその一部を出すことになる。この物が水に浮いた状態に、水面以外の基準となる面よりも上に出っ張る様子が、喩えられることがある。(53)で鎖骨のあるところは体の表面の他の部分よりも高く出っ張っていて、この様子が“浮き出す”と表現されている。

(53) 鎖骨が浮き出していて随分、瘦せたと思った (深い河, 145)

“浮く”が表す“水面から出る”という点に焦点をあてると、母体とも言えるものからの分離、隔絶といった意味を表すことにもなる。(54)では始めにもらった旅費と実際に使った旅費の差額が旅費という枠から外に出ている。(55)でゴワスというあだなを持つ生徒は、一人だけクラスのみんなという枠から隔絶した存在となっている。

(54) 新幹線の代わりに寝台特急を使って浮かした出張旅費はちゃんと返しなさい— (朝日 97.7.8)

(55) クラスの中でも浮いてしまっていたゴワスは友達も出来ず…

(そこに僕はいた, 78)

(37)~(55)の“浮く”“沈む”を用いた比喩表現は、これらの語が本来表す意味の

中でも、物が水面上にあるかないかといった水面に焦点を置いた部分が比喩に生かされたが、(56)～(69)においては、水底を含めた水中全体での動きを表す部分が比喩に生かされる。

Lakoff & Johnson(1980, p.14)が挙げる比喩の中で、“上下”の概念は重要な位置を占める。多くのことがらが“上下”の尺度に合わせて捉えられる。この中には、社会的権力の強さと気分の変化が含まれているが、これは英語のみならず、日本語についてもあてはまる。権力を持つ者は上、力ない者は下、元気は上、憂うつは下と結び付けられる。異なるのは、日本語においてはこの上下の尺度が水の中に置かれることが多いという点である。<sup>3)</sup>

社会的権力の強さ、社会的立場に対応する上下の尺度は、水底から水面という場に置かれる。力のない者、立場の悪い者は水底に“沈み”，権力のある者、立場のよい者は水面に“浮く”。よって社会的立場の変化をまとめると(56)になる。面目がたたない、つまりいい立場になれないということは、“浮かぶ”ことができないということで(57)の表現になる。(58)では水に相当するものとして権力社会という枠が明確に示され、権力を得るものが到達する所は“表面”と明示されている。(59)では水が“泥水稼業”という枠に替わる。この枠に入ること自体が社会的立場の転落を意味するため、この枠は社会的権力についての中立的尺度にはなれないが、社会的転落を表すのに“沈む”という表現は適している。

(56) 浮き沈み

(57) 浮かばれない

(58) 権力闘争に敗れたものは…二度と権力の表面に浮かび上がれなかったりね (広告批評, 288)

(59) 泥水稼業に沈める

(比喩表現の理論と分類, 354)

気分の変化は上にある水面が元気な状態に対応し、下にある水底が憂うつな状態に対応する尺度が用いられる。“浮く”“沈む”に結び付く語は人(60)(61), 心(62)(63), 顔(64), 表情(65), 眼の光(66), 言葉(67), 食卓(の雰囲気)(68)と、気分の現れる様々なものが可能である。

(60) TVでお前を見て浮かれちまって。…お前のことを自慢してやりたい

3) 全て水の語彙で表されるわけではない。社会的地位の変化は“のぼる”，また気分の変化も“はずむ”“舞い上がる”といった、地上での上下の変化に喩えられることもある。

- 一心でな (女社長に乾杯, 333)
- (61) 彼女は沈み込むようになり… (深い河, 37)
- (62) 「ぞめき」のリズムに心が浮き立ち, じっとしてられない  
(朝日 97.8.10)
- (63) 心をしずめる (比喩表現の理論と分類, 368)
- (64) 浮かぬ顔 (女社長に乾杯, 275)
- (65) 大津の表情が沈んでいくのを… (深い河, 66)
- (66) 眼の光が次第に暗く沈み, ふっと沈黙する (同上, 141)
- (67) 「…せっかく, みんなで一つになって頑張ってきたのに…」伸子の言葉は沈み込んで行った (女社長に乾杯, 405)
- (68) 食卓は浮き立っていた

気分を表す“浮く”の用法は、(69)のように擬態語の副詞にも表れる。

(69) 浮き浮きした気分

ただし、気分の変化を表すのに“浮く”“沈む”という語が適しているのは、これらの語が持つ上下の概念だけが理由なのではない。“浮く”“沈む”という語は本来、水底を離れて上方へ向かう、水底へ向かうという意味も持っている。物は水底に着いている時は静止しているが、離れば不安定に動き続ける。“浮く”“沈む”により安定感の違いも表すことができるのである。

“浮く”“沈む”の持つ意味の中でも特に、水底を離れて上方へ向かう、底へ向かうといった、水底に焦点を置いた部分が比喩に生かされ、安定感の違いを表す例を更に見る。(70)~(75)では“浮く”“沈む”に尺度の概念はなく、ただ安定感のあるなしだけが表される。恋愛感情というのは精神の興奮状態を伴うが、この不安定さを(70)の“浮いた気持ち”は表す。“浮く”という語はまた(71)においては、一つの物事や一人の異性のもとに安定しないことを、(72)では意識の不安定さを表す。(73)(74)(75)では感情、悦び、悲しみが水底を離れ不安定に動く物のように捉えられ、こうした感情を感じないように落ち着かせることが“沈める”という語で比喩的に表されている。

- (70) この年になって、惚れたはれたの浮いた気持ちがあるわけじゃあないんですが  
(テレビ放送 NHKドラマ 97.7.30)
- (71) 浮気

- (72) 熱に浮かされる  
 (73) 感情を(底に)鎮める (比喩表現の理論と分類, 368)  
 (74) 悦びを押し沈める (同上, 360)  
 (75) 悲しみを押し沈める (同上, 360)

以上見てきたように“浮く”“沈む”の二語は、本来の意味から様々な部分を取り出され比喩に用いられるが、その取り出され方はほんの一部に限られることもあれば、複合的に取り上げられる事もある。例えば、社会的地位の変化は二語の持つ上下の位置、方向性を取り上げたものだが、気分の変化を表す場合はこれに加え、二語が表す安定性も取り込まれる。次の(76)でも“浮く”“沈む”という二語の対立による上下の尺度と安定感により気分が表わされる。しかし(76)の場合は更に複合的に語の本来の意味が用いられる。“沈む”が本来描写する状況の舞台である水中がここでは悲しみに替わり、人はその水底にいるものとして表現される。深さのある水の底から人はなかなか出られないという点を用いて、悲しい状態から抜け出せないことが表されるのである。

- (76) 悲しみに沈む (比喩表現の理論と分類, 335)

漂う：

“漂う”は本来、水面に浮かんで揺れ動くことを表す。水面にあることを表す点は“浮く”と同じだが、“浮く”が表す上への方向性は表さない。また“浮く”が表さない不安定な動きを表す。

まず“漂う”が成立する場について考察する。“漂う”という語が本来の意味で用いられる場合、この動きが成立する場は水中であるが、比喩表現においては他の場に置き換えられる。(77)では“町の跡”という空間、(78)では“話”，(79)では“報告書”，(80)では頭の中がこれにあたる。

- (77) ジェリコの近くのソドムとゴモラの町の跡には…未だになにやら怪しい香りの煙が漂っていて… (イタリア遺聞, 138)  
 (78) 青年の空虚な話のなかには美津子の一番嫌いな偽善の臭いが腐った魚のように漂っていた (深い河, 266)  
 (79) 十五世紀後半からのトルコとの交渉を行うヴェネツィアの外交官の報告書には、実に苦い絶望感が漂う (イタリア遺聞, 67)  
 (80) ある記憶が漂い出てきた (フルハウス, 40)

次に“漂う”が比喩として用いられる時に伝える意味について更に考察する。“漂う”は比喩の用法においては、不安定さ不明瞭を伝える。これは、第一にこの語が本来動きの不安定さを表す語であることによる。第二には、“漂う”という語が“浮く”という語を支える水面上と水面下の対立概念を明確には持たないためである。“浮く”が表す水面下から水面上、つまり見えない状態から見える状態になるといった明瞭な変化や、水面下に対する水面上、つまり見えない状態に抗するものとしての見える状態を、“漂う”は表さない。“浮く”が明らかに示す“見え”を、“漂う”はあいまいなままにする。

(81)(82)(83)で“漂う”は顔に現れる表情を表す。顔の表情は(41)(42)で見たように“浮く(浮かぶ)”でも表される。どちらの場合も顔面が水面に、表情が水面に存在する物に喩えられた表現である。二つの表現で異なるのは、伝える表情の現れ方、明瞭さである。“浮く”よりも“漂う”の方が、伝える表情は不安定で不明瞭なものとなる。(81)(82)(83)で“漂う表情”を形容する他の語も、表情の不安定さを示すもので、“漂う”の伝える不安定さ、不明瞭さに合致している。(81)で表される表情は“かすかな”“薄笑い”で、“蒸気のように”現れる。(82)の表情は“茫漠とした”ものであり、(83)の表情は“途方に暮れている”。

- (81) 占師の頬にかすかな狡そうな薄笑いが蒸気のように漂って消えた  
(深い河, 283)
- (82) 父の目のあたりには何かを待ちつづけているときの茫漠とした表情が漂っている  
(フルハウス, 13)
- (83) 怖じけづき途方に暮れている表情が頬のあたりに漂っている  
(もやし, 99)

不明瞭さ、つまり、あいまいな“見え”を伝えるところから、比喩表現において“漂う”は、目に見えにくいものや見えないものに多く用いられる。(84)で“漂う”と表現される“煙”は、目に見えはするが明確な姿かたちを持つものではない。動きも不安定である。(85)の“音”と“歌声”は見えない。“壁を通して”聞こえる音はかすかで、その存在さえも不確かなものである。聞こえてくる“音”は、やはり水にまつわる語“流れる”で表現されることもあるが、“流れる”が用いられる場合、音はより明瞭に聞こえるものと感じられる。(86)の“異臭”つまり“匂い”も目には見えず、空気中を不安定に動く。(87)(88)での“匂い(臭い)”はこの語自体が比喩であり、実際には(89)(90)と同様、“雰囲気”“気配”を表す。これは当然目に見えるものではない。物理的に存在する物ではないので、物理

的な動きもありようがない。しかし、こうした雰囲気や、不明瞭ながらその空間に存在するように、我々人間は感じるのである。この不明瞭なものを表すのには“漂う”という語が適している。

- (84) 男は…ショートピースに火を点け、顔のまわりに煙を漂わせた  
(フルハウス, 52)
- (85) 隣の部屋で誰かが歌いはじめ、壁を通してピアノの音と歌声が漂って  
くる  
(もやし, 155)
- (86) トイレのなかには酸っぱい異臭が漂っていた (フルハウス, 45)
- (87) 大人の女の匂いがほんのすこし漂っていた (そこに僕はいた, 170)
- (88) 台所もきれいになり、テーブルクロスが敷かれ生活臭さえ漂っている  
(フルハウス, 50)
- (89) 一時代昔の落ち着いた雰囲気の漂う、聖(サン)マルコ広場にほど近い、明るくて可愛らしいホテル (イタリア遺聞, 24)
- (90) ペットショップには夏の気配が漂っている (もやし, 165)

“漂う”という語の表す動きの不安定さだけが、比喩において特に生かされる場合もある。気球と月はどちらも不明瞭な存在とは言えない。だが、(91)(92)のように気球が空に“浮き”も“漂い”もできるのに対し、(93)(94)のように月は空に“浮く”ことはできても“漂う”ことができない。気球が不安定な動きをするのに対して月は不安定な動きをすることがないからである。

- (91) 空に浮く気球  
(92) 空に漂う気球  
(93) 空に浮く月  
(94) \*空に漂う月

また次の(95)では“あらぬ方向”という表現が示すように、視線の動きは一定しておらず、この不安定さを“漂う”という語が伝えている。(92)(95)に物の不明瞭さは表されていない。

- (95) 男はあらぬ方向に視線を漂わせている (もやし, 153)

## 2. 容器のイメージが生きる比喩

水が溜まる時、その場は水を入れる一種の容器となる。容器のイメージは Lakoff & Johnson (p.29) にあるように、英語において多くの比喩表現に用いられるが、この容器のイメージは日本語においても、多くの比喩表現に見られる。英語と日本語で異なるのは、日本語の場合、容器のみならず、容器を出入りする水が加わったイメージが比喩表現の基盤になる例が多い点である。次に挙げる語は全て容器と水との関係を表すのに用いられる語で、この容器と水のイメージが比喩表現に用いられる。以下、これらの語を含む比喩表現について考察する。

満ちる、満たす、たまる、ためる、たたえる、みなぎる、溢れる、溢れ出る、こぼれる、こぼす、もれる、もらす

満ちる、 満たす：

“満ちる” “満たす” は容器の中に物がいっぱいになること、また容器を物でいっぱいにすることを意味する。中に入る物は水に限られはしないが、水が最も適すると思われる。容器を隙間なく埋め尽くす物でなければならず、また枠によって形を変えるような柔軟性を持つ物でなければならないからである。(96)のように容器の半分だけの場合には使えない。(97)では箱がもともとテレビ梱包用の物で、テレビ一台入れた時に隙間を出さないとしても、テレビ一台の外形は変化するものではないので、“満たす”は使えない。容器を隙間なく埋め尽くすために自らの外形を変える物で、日本人の生活において最も身近な物は水である。“満たす”という状況を成立させる物として第一に想起されるのは水であり、水を用いた(98)は問題なく適切な文である。

(96) \*盃に半分だけ酒を満たした

(97) \*箱をテレビ一台で満たした

(98) 水槽を水で満たした

“満ちる” “満たす” を用いる比喩表現においては、(98)に見るような、容器に入る水のイメージが用いられる。容器および容器に入る水に見立てられるものは(99)~(100)に見るように、物理的状況を表すものから抽象的な感覚を表すものまで様々である。

(99)～(104)には“満ちる”が用いられているが、容器と水にあたるものは、(99)においては空と雲、(100)ではホールと音、(101)では筋肉と壮年の男の魅力、(102)では眼と屈辱感、(103)では体と満足感、(104)では言葉と自己嫌悪である。(99)が全く物理的な状況を表すのに対し、(104)は抽象的な主観的判断を表している。

- (99) まっ白な雲のいっばいに満ちた空 (雁, 126)  
 (100) 上質な音がこのホールを満たした (朝日 97.7.9)  
 (101) 丈高く引きしまった筋肉は… 壮年の男の魅力に満ちている  
 (イタリア遺聞, 167)  
 (102) 屈辱感にみちた眼 (深い河, 77)  
 (103) 満足感が、小さな体に満ちている (朝日 97.8.10)  
 (104) 彼の自己嫌悪にみちた言葉 (深い河, 67)

(105)～(108)には“満たす”が用いられるが、容器と水に見立てられるのは(105)では話者の周辺的空間と臭気、(106)ではより抽象的な文字と声、(107)では心と暖かな想い、(108)では心と記憶である。ただし(108)はエスパーであり他人の心を読むことができる人物七瀬の視点から描かれているから、この文は作家の意図としては比喩ではない七瀬の心の目に見える光景を表す。しかしこれは作家が、ひいてはエスパーでもない普通の人間が、人の心について抱くイメージを基にしたものに過ぎない。普通の人間はこのイメージを生かした比喩表現を用いる。よって、この文は普通の人間の発する比喩表現としても通用する。

- (105) 臭気があたりを満たす (イタリア遺聞, 246)  
 (106) 手紙すべての字が大津の甘ったれた声で充されていた  
 (深い河, 196)  
 (107) 東京の下町を歩くと満たされた感じになる (朝日 97.7.9)  
 (108) いかにも話のはずみのように七瀬がそう持ち出すと、沖の記憶の中の、  
 今までほんの薄皮一枚に覆われていたものが弾けるようにとび出してき  
 て彼の心をいっばいに満たした (エディプスの恋人, 38)

“満ちる”の表す水量の多さを更に強調した語として“満ち満ちる”があるが、この語が比喩表現として用いられる場合、容器と水に喩えられるものは“満ちる”の場合と変わりなく、具体的なものから抽象的なものまで可能である。(109)では場所と人間という具体的な物が、(110)では人間と抽象的な想いが、(111)では

抽象的な空間と発見や驚きが、それぞれ容器とその中の水に喩えられている。

- (109) 近代の必要性をまったく理解しない大衆達が満ち満ちているこの日本の地 (広告批評, 366)
- (110) オジサン主義者は…確信に満ち満ちている (同上, 496)
- (111) 身近な生活空間の中にも、新しい発見や驚きが満ちみちている (同上, 496)

水が容器に“満ちる”と容器の中の水位が高くなることから、海の水位が高くなる様子も“満ちる”という語を用いて“潮が満ちる”と表現される。(112)は容器としての躰に水としての悦びがいっぱいになることと解釈できるが、悦びはまた潮に喩えられているとも解釈できる。(112)の出典には(113)の文も現れるが、ここでは明らかに潮のイメージが存在し、悦びは不安と共に潮の満ち引きに喩えられている。

- (112) 躰にゆっくりと満ちてくる悦びで震えるほどだった (潮合い, 135)
- (113) しかし終業時間が近づくと不安と悦びが互い違いに満ちたり引いたりするのを感じた。夏休みに入ってからというもの激しい満ち引きが一日に何度も起きるようになった。 (同上, 144)

たまる、ためる:

水が一所にとどまり集まる様子、あるいは集める動作を表す。水の集まる場所は一種の容器と捉えられる。水と水の“たまる”容器に喩えられるのは、やはり具体的なものから抽象的なものまで可能である。(114)では具体的な物でランナーと壘、(115)ではやや抽象的な疲れと体が水と容器の關係に喩えられる。(116)(117)では仕事と金が水に喩えられるが、容器に喩えられるものは特定できない。(118)では秘密と心が水と容器にあたる。容器に喩えられる心は、ここで共起する“洩らす”という語彙にも対応している。(119)では息と体、(120)では日の光と限られた空間が、水と水の溜まる容器にあたる。(121)で“タマリ”とは“たまる場所”を意味するが、人々が水に、人の集まる店が水の溜まる容器に喩えられた表現と言える。

- (114) ランナーがたまった (ドカベン, 40)
- (115) 疲れがたまる／疲れをためる

- (116) 仕事がたまる／仕事をためる  
 (117) 金がたまる／金をためる  
 (118) 人には心に溜めつづけた秘密を洩らしたくなる場所と時とがあるもの  
     だ (深い河, 318)  
 (119) 溜め息  
 (120) 陽溜り  
 (121) このような店づくりだから、当然、人々のタマリになった  
     (イタリア遺聞, 70)

たたえる:

水を容器いっぱい溢れるばかりに満たしている状態を表す。“溢れる”までには到っていない。“満たす”が容器の中全体に存在する水を表すのに対して、“たたえる”は水が容器の上限にまで達している点に焦点をあてる。ただし、“浮く”や“漂う”ほど水面に焦点をあてた表現ではない。また“満たす”が動的な変化を表すのに対し、“たたえる”は静的な状態を表す。

“たたえる”のこうした意味は、その比喻表現において重要な働きをする。(122)においては“笑み”と顔が、水と容器に喩えられている。笑みは表面的なものではなく、心の中から出ているもので、顔中に広がる。この“たたえる”の伝える意味を“あふれんばかり”という語は更に明確にしている。(123)のように表面的な“薄笑い”は“たたえる”ことはできない。また笑みは顔という容器の上限にまで達し、外に表情となって現れる。外への現れを示さない語“満たす”はこの場合用いられず、(124)は非文となる。他人の背中に表情を感じる時、背中の表情とは顔に現れる表情のように笑っているのか怒っているのかとすぐに分かるようなものではない。じっと見ていると中から出てきているように感じられる類のものである。表面だけのものではないので、(125)のように“たたえる”は用いられるが、(126)のように表面に焦点をあてた“浮かべる”を用いることはできない。(127)では小説と魅力という抽象的なものが容器と水に喩えられているが、小説の魅力とは小説の中にあるもので、表面的なものではなく、“たたえる”という表現が適わしい。(128)で“たたえる”は微笑の静かさを伝えている。

- (122) あふれんばかりの笑みをたたえて答える (朝日 97.8.10)  
 (123) \*薄笑いをたたえて答える  
 (124) \*笑みを満たして答える  
 (125) 背中が表情を湛える (比喻表現の理論と分類, 372)

- (126) \*背中が表情を浮かべる  
 (127) どの一編もそれぞれに不思議な魅力をたたえた傑作ぞろい  
 (銀河鉄道の夜・表紙)  
 (128) 妻は頬に微笑をたたえて遠い山並を見つめていた (深い河, 254)

みなぎる:

水が容器の中に勢いよく増えてきて、満ち溢れるばかりいっぱいになる様子を表す。このイメージが比喩表現に生かされる。(129)では空が容器に、光が水に喩えられる。(130)では腕が容器に力が水に喩えられる。(131)では人が容器に喩えられるが、その中で“みなぎる”水には殺気が喩えられ、水面上を“漂う”ものとして“催涙ガスの匂い”が提示される。(131)においては“みなぎる”と“漂う”が一貫した一つの水のイメージの中に収められている。

本来、共に水量の多さを表すということで、“みなぎる”の表す状況は“満ちる”の表す状況に近い。(129)~(131)に含まれる“みなぎる”も“満ちる”に置き換えることができる。異なるのはただ、“みなぎる”の方が勢いを感じさせる点である。勢いを感じさせない“悲しみ”は、(132)に見るように“みなぎる”ことが難しい。この場合(133)のように“満ちる”ならば問題なく用いられる。

- (129) 雲がすっかり消えて、新しく灼かれた鋼の空に、つめたいつめたい光  
 がみなぎり… (からすの北斗七星, 113)  
 (130) 腕に力が漲ってくる (もやし, 188)  
 (131) 殺気をみなぎらせ、催涙ガスの匂いを漂わせる警察の野戦指揮官  
 (イタリア遺聞・解説, 250)  
 (132) \*悲しみをみなぎらせたまなざし  
 (133) 悲しみに満ちたまなざし

溢れる:

水が容器にいっぱいになって外に出ることを表す。(134)は、この水の動きがそのまま部屋から出る人の動きに置き換えられた直喩である。部屋が容器に、人が水に喩えられている。

- (134) 扉が開くと、ダムが決壊して水が溢れ出るように、ドドッと人が吐き  
 出される (女社長に乾杯, 317)

“溢れる”の場合も具体的な状況から抽象的なものまで、様々なものが容器と水に喩えられる。(135)(136)は建造物と人、(137)は空地と光、(138)は部屋と音といった具体的なものが容器と水に喩えられる。(139)で容器に喩えられるのは、(135)～(138)と同様、土地という具体的な空間であるが、水に喩えられるのは抽象的な雰囲気である。(140)(141)では容器に喩えられるものも水に喩えられるものも共に抽象的である。

先に“溢れる”の表す意味を、「水が容器にいっぱいになって外に出ること」と述べたが、比喩表現においては「外に出る」という部分が落ちることがある。(135)において水に喩えられる人々は一部建物の外に出ているが、(136)の少年たちは一人も出てはいない。“溢れる”という語は人数の多さ、場所の混み具合を伝えるばかりである。(137)～(141)も「外に出る」ことまでは意味していない。“満ちる”という語に置き換えることもできる状況で、ただ数の多さ、感じの強さを表現するために“溢れる”は用いられている。(142)の“満ちあふれる”も同様である。

- (135) コレージュ・ド・フランスに入れない人々が外にあふれた  
(ベルクソン, 63)
- (136) 集配所は… 沢山の少年たちで溢れていた (そこに僕はいた, 52)
- (137) 光にあふれた林間の空地 (ベルクソン, 63)
- (138) 部屋中音で溢れている (もやし, 164)
- (139) 大阪の道頓堀は… 生活感にあふれた町だ (朝日 97.7.9)
- (140) 童話の進行はどこまでも、無邪気で、明るく、ユーモアに溢れて…  
(銀河鉄道の夜・解説, 327)
- (141) 純粋な敵意に溢れた失われた日々 (そこに僕はいた, 150)
- (142) 私たちの身の回りに、「未知」が満ちあふれる  
(コンピュータと教育, 105)

人が容器に喩えられることは多い。この場合容器の中の水に喩えられるのは、その人物の性質や感情である。この比喩の場合、“溢れる”が本来持つ意味の内「外に出る」という部分を特に生かす例と「中身の多さ」を特に生かす例とが存在する。「外に出る」部分を生かす場合は、性質や感情が何らかの形で外に現れ出てしまうことを、「中身の多さ」を生かす場合には、性質や感情の特別の強さを表すことになる。

(143)(144)(145)では“溢れる”の持つ「外に出る」という部分が特に生かされている。(143)では高位聖職者の持つ強い敬虔な宗教心が、行動という形をとって表に出る

ことを表す。(144)は切なさの程度の強さも伝えはするが、その切なさがため息という形をとって外に出てしまったことを特に表す。(145)で“溢れかかる”とは、憎悪が形をとって外に現れ出ようとするところを表現している。一方、(146)(147)では“溢れる”の持つ「中身の多さ」を伝える部分が特に生かされている。(146)では顔に見えるやさしさの程度を主張し、(147)では健康と若さの程度が高いことを主張している。

(143)(144)(145), 特に(144)(145)で“溢れる”を“満ちる”に置き換えることはできない。(144)の“(ため息を)漏らす”, (145)の“消えてゆく”という表現は“溢れる”の持つ「外に出る」という意味を受けたものであるからだ。一方(146)と(147), 特に(147)では“溢れる”を“満ちる”に置き換えることができる。(147)では“溢れる”という語が本来持つ「外に出る」という意味が重要ではなくなっているからだ。比喩においては、語の本来持つ意味の内、特に取り出され生かされる意味もあれば、捨てられる意味もあることが、(143)(144)(145)と(146)(147)の対比から明らかである。

- (143) これら高位聖職者のイエルサレム詣では、もちろん敬虔な宗教心にあふれての行動であったが … (イタリア遺聞, 134)
- (144) 切なさが溢れて思わずため息を漏らしてしまった (白仏, 56)
- (145) 溢れかかっていた憎悪がゆっくりと消えてゆくのを感じた (もやし, 168)
- (146) 顔にやさしさがあふれる (比喩表現の理論と分類, 340)
- (147) 彼女たち(看護婦)は病院で働いているのに病気や不幸とはまったく関係のない健康と若さとに溢れている (深い河, 9)

こぼれる, こぼす:

水が容器から出ることを表すが、“溢れる”のように容器が水でいっぱいになっていることは表さない。よって比喩表現においても、容器に喩えられるものから何かが出ることを表しはするが、出る物の数量的多さや程度の強さを表すことはない。(148)で口から出る日本語は“たどたどしい”。(149)で見える歯は小さい。(150)の愚痴の量も多い必要はない。

- (148) ガストンの口から零れるたどたどしい日本語 (深い河, 161)
- (149) 小さく真っ白な歯がこぼれて見える (フルハウス, 70)
- (150) 愚痴をこぼす

洩れる, 洩らす:

水が容器から穴や隙間を通して出ること, あるいは出すことを表す。このイメージが比喻として用いられる場合, 切り出され生かされる点は二つに分けられる。一つには狭い隙間から少量出る点で, これは物理的状況を表すのに利用される。二つには本来水を溜めるためのものである容器から, 水が出てしまうという点で, これは抽象的ことがらを描写する際に特に生かされる。

まず“洩れる”について見る。(151)~(154)は第一の点を生かして具体的な状況を表し, (155)は第二の点を生かして比較的抽象的なことがらを表す。(151)(152)では雲間, 壁の間という狭い隙間から, 水に喩えられる光が少量出てきている。(151)の“弱々しい”, (152)の“僅か”といった表現が, 程度, 数量の低さを示している。(153)の声は弱々しい小さな声であることが伝わる。(154)の案内人の説明もはっきりとは聞こえないものであろう。(151)~(154)では全て狭い隙間から少量のものが出るということで共通しているが, (154)では, これに加え, 本来出るべきではない物が出るという第二の点も生きている。ツアーガイドの説明はそのグループのためのもので, グループ外の人に聞かせるためのものではない。(155)が表すのは抽象的ことがらで, ここでは本来出るべきではない物が出るという第二の点が前面に出て生かされている。

- (151) 雲間から洩れる弱々しい冬の陽 (深い河, 156)  
 (152) 僅か壁の間から外の光が洩れているような場所だった (同上, 308)  
 (153) ありがとう。喉から声が洩れ… (もやし, 154)  
 (154) 案内人の説明が米国人グループの輪のなかから洩れてきた  
 (深い河, 313)  
 (155) 事件が洩れる (比喻表現の理論と分類, 322)

次に“洩らす”について検討する。“洩れる”の場合と同様, 狭い隙間から少量出る点と, 本来容器とは水を溜めるものであるのに水が出てしまうという点の二点が, 比喻表現に生かされる。

(156)では第一の点, 出るものが少量であることが生かされる。“かすれた”という形容がこれに合致している。この場合出てはいけないのに出てしまうという第二の点は生かされない。(157)では二つの点がともに生かされている。出るものは“息ひとつ”と少量である。かつ, この話者は無言のいたずら電話をしている所で, 自分の声を聞かせるわけにはいかない。つまり, 少量の声も息も口から出してはいけない状況にある。(158)~(162)は第二の点, 出てはいけないのに出て

しまうという点が生かされていて、量の大小はここでは重要ではない。(150)で出るのは“ため息”という思わず出てしまうもので、積極的に出そうとするものではない。また“しまった”と続くことから、本来外に出るべきものではなかったということが明らかである。(159)の言葉は聴聞会という公的な場に出る以前の私的なものであり、建前上、外に発表すべきものではない。(160)(161)も出てはいけないものが出るということで、“洩らす”という表現が用いられている。出るのは人に言えない病名、心に隠している悩み、秘密である。出てはいけないものであることは、前後の文脈からも明らかである。(160)では病名が洩れることを“こわかった”と述べている。(161)では“うちあけられぬ”ものであることが明示され、うちあけたことを“しまった”という後悔を示す言葉で続けている。

- (156) かすれた声を洩らした (深い河, 339)
- (157) 口をぴったり送話口に押し当てていたが、息ひとつ洩らさなかった  
(もやし, 189)
- (158) ため息を漏らしてしまった (白仏, 56)
- (159) 公式に釈明できる場を使って、「反論すべきことはきちんと反論するつもりだ」とも事前に漏らしていた (朝日 97.7.25)
- (160) 素人の彼女がうっかり本当の病名を妻に洩らさないか、それがこわかった  
(深い河, 16-7)
- (161) わたくしは主人にもうちあけられぬ悩みや心の秘密を洩らしてしまっ  
た (同上, 29)

“洩れる”“洩らす”が本来持つ意味の内、出てはいけないものが出るという点を生かした比喩表現に、“～洩らす”という他の動詞の後に続ける接尾語としての用法がある。すべきことが容器の中の水に喩えられる。すべきことをしないのは、この含まれるべき容器の中から外に出てしまうことになるという捉え方を反映した表現である。(162)では聞くべきことという集合があり、何かを聞かないということはこの集合から聞くべきことの一部が出てしまうことになる。本来出るべきことではないということで、行動しない意志を表す助動詞“まい”が続くのは自然な流れである。

- (162) 全てを聞き洩らすまいと耳を傾ける (もやし, 98)

## ま と め

以上、日本語の水にまつわる語の中から、溜まった水の外枠が意味の重要な部分を成す語について、その比喩表現を検討した。

比喩においては語の本来の意味の内、失われるものと生かされるものがある。ここで扱った比喩表現の場合、まず失われる意味は水の場面について描写するという点であった。本来水のある場面での事態を表す語が水以外の場面で用いられて比喩表現となっている。他の本来の意味については、比喩において複数生かされる場合と、ただ一点だけが生かされる場合とがある。一点だけが生かされる場合、それは水の外枠に関して述べる意味であった。語の本来の意味において際立つ意味成分が、比喩表現において特に生かされるのである。

もっとも、比喩表現に一点だけ生かされる際立つ意味成分は、一語につき一種類とは限らない。たとえば“浮く”という語の本来の意味の内、際立つのは水面水底に関わる部分であるが、意味成分としては複数に分けられる。ここで“浮く”の比喩表現について簡単に振り返って見ることにする。まず“浮く”が本来表す物の動きを水の場面から水以外の場面に置き換えただけの用法がある。この場合は本来の意味が場面以外については多く保たれる。一方、際立つ一面だけが切り出され生かされる比喩が数種存在する。物が水面上に出るとよく見えるようになる点を取り出して、様々な場での見えを表す用法がある。物が水に浮くと水面上の部分と水面下の部分とに分断されることから、隔絶を表す用法もある。物が水底を離れると動きが不安定になることから、精神などの不安定さを表す用法もある。様々な局面が比喩に生かされる可能性を持つわけだが、水面水底に関わる局面であるという点では共通している。“浮く”という語が本来表す意味の内、際立つ意味は水面水底に関わる部分であり、これが比喩表現においては特に切り出され生かされるのである。

本稿で扱った語以外でも、水にまつわる語が比喩表現に用いられる例は数多い。他の水にまつわる語の比喩表現については機を改めて論ずる事としたい。また水にまつわる語がこのように多く比喩表現に用いられるというのは、日本語圏の文化が大きく反映している可能性を示唆している。文化的側面からの検討も今後必要と思われる。

## 参考文献

- Lakoff, George & Johnson, Mark (1980) *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.

## 例文の出典 (五十音順)

- 赤川次郎 (1995) 「女社長に乾杯！」『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』  
新潮社
- 朝日新聞 (1997)
- 市川 浩 (1991) 『ベルクソン』 講談社
- 遠藤周作 (1993) 『深い河』 講談社
- 国立国語研究所 (1977) 『比喩表現の理論と分類』 秀英出版
- 佐伯 胖 (1986) 『コンピュータと教育』 岩波書店
- 塩野七生 (1994) 『イタリア遺聞』 新潮社
- 辻 仁成 (1992) 『そこに僕はいた』 角川書店
- \_\_\_\_\_ (1997) 「白仏」『文学界』 97年7月号 文藝春秋
- 筒井康隆 (1995) 「エディプスの恋人」『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』  
新潮社
- テレビ放送 (1997)
- 橋本 治 (1995) 『「広告批評」の橋本治』 マドラ出版
- 宮沢賢治 (1951) 「クねずみ」「銀河鉄道の夜」「二十六夜」「雁」  
「からすの北斗七星」『童話集 銀河鉄道の夜 他十四篇』 岩波書店
- 柳 美里 (1996) 「フルハウス」「もやし」『フルハウス』 文藝春秋
- \_\_\_\_\_ (1997) 「家族シネマ」「潮合い」『家族シネマ』 講談社
- 水島新司 (1997) 『ドカベン プロ野球編 13』 秋田書店